

令和八年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

国語

解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があつたら、解答用紙をおもてに向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。(問題を持ち帰ることができません)

[illegible]

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

一般的に①バイアスというのは、偏りや思い込み、思い違い、特定の※概念への※固執など、人間の認知の歪みを幅広く指す言葉です。私たちが情報に接するとき、自分では正しい判断をしていると思っても、認知の歪みが働き、実際には正確ではないことがあります。

でも、人類の長い進化の過程で、なぜ正確な判断を妨げるような仕組みがなくならずに残ってきたのでしょうか。

私は、そこにこそバイアスの存在理由があるように思います。

つまり、人間が生き延びるためには、むしろ②バイアスが必要だったのではないかとことです。

バイアスの存在理由を簡単に言ってしまうと、「人間の脳の限界」です。

私たち人間の脳というのは、高速で正確な計算ができるわけではありません。たとえば、約1億2千万人の日本の全人口の考え方を計算して、一瞬で平均値や中央値、標準偏差を出せるのであれば、それこそ今の日本人の普通や常識と言われるものがわかるかもしれません。

でも、それは不可能ですよね。残念ながら、今の人間の脳の性能には限界があつて、正確に「普通」を※抽出することはできません。

ですから、もしも今より脳の性能を上げたいなら、もっと脳の体積を大きくするしかありませんが、そうなると骨盤の大きさに限界がありますから胎児を宿したお母さんの体は壊れてしまいます。

これ以上、脳を大きくできないならどうすればいいのかというと、現状の脳の大きさのままで、よりよい答えを出すための工夫をします。

ければならないのです。

その工夫の一つが、バイアスなのかもしれません。粗い計算でいから、瞬時に大まかな答えを出すという工夫です。

円周率であれば100桁まで暗記しなくても、「およそ3」でいいから余った計算のための※リソースを他のことにふり分けるとか、論理的な思考は※スキップして脳にかかる負担を減らし、エネルギーを節約するなどです。

私たちの脳は、正確さよりも速度とエネルギー効率を重視した結果、バイアスというものが必要になったと考えられるのです。

ところで、鳥には群れて飛ぶものが多いです。空を見ていると、数羽、ときには数十羽、数百羽が群れをつくり、同じ速度で同じ方向に飛んでいることがあります。

不思議なことに、彼らは方向を変えるときも一斉にターンしているように見えます。いったいどうやって意思を伝え合っているのでしょうか？

コンピュータによって、鳥の生態から群れの形態を再現したものを「ボイドモデル (Void model Boid)」は鳥っぽいという「bird-oid」から作られた造語」といいますが、その解析によると、鳥の群れには全体を把握して※統帥をとっているリーダーのような存在はいません。鳥は、自分の周辺の数羽を認知しているだけで、群れ全体は認知していないと言われています。

人間も、③この鳥の習性と似ているところがあります。

自分の周りに同じような人が3人もいれば、それがすべてだと思ひ込みやすい性質を持っているということです。

たとえば、クラスの中によく赤い服を着ている人が3人いて、その3人がたまたま数学を得意としていたら、「数学が好きな人は皆、

赤い服を着ている」と思い込んでしまう、といった性質です。

実際には3人では母集団の数が少なすぎて、赤い服と数学の成績の間に何らかの関連性があると考えerには無理があります。

その他にも、よく「I」とか「II」などといった言い方をする人がいますよね。

このように、一部の人のある側面だけに当てはまることを、広く全体にも当てはまると決めつけてしまうことがあります。私たちは身近に同じような人が3人ほどいれば、それが真実だと思い込んでしまうような性質を持っているのです。

特に、自分と違う集団や共同体の人間については、ほとんど同じに見えてしまうことを「④外集団バイアス」といいます。

もちろん東京にも親切な人もいますし、大阪にもものんびり屋さんはいるでしょう。それなのに、科学的な根拠こんきょも検討しないまま、よく知らない人たちに關してすべてひとくくりにしてしまふ。

なぜなら、私たち人間には、時間をかけて物事が正しいかどうかを検討する能力はそれほど強く求められていないからです。それよりも、短時間でざっくり物事を判断する能力や、その場で一番声の大きい人に合わせる能力などの方が必要とされることが多く、時間をかけて正しい解を出すことよりも、限られたリソースや時間の中で、よりよい判断をすることの方が求められているのです。

人間の長い歴史を考えれば、そうしないと日々の食糧しょくりょうにありつけずに死んでしまうこともあったはずでず。

その影響えいきやうなのか、私たち人間には、じっくり考える性質以上に、素早く決める性質の方が強くなっています。

もちろん人間にはゆっくり考える性質もありますから、周囲の環境かんげうが落ち着いているときには時間をかけて深く洞察とうさつすることもありますが、一般的にはパッと判断して迅速じんそくに行動できる人の方が生

きやすいのではないのでしょうか。正解ではないかもしれないけれども、よりよい方を素早く選ぶ能力が求められているのです。

「認知の歪み」などと言うと、何だかよくないことのように思ふ人もいるかもしれません。でも、限られたリソースの中でスピーディーに※概要をつかむ力があるということは、生物の生態としては、かなり**されていると言えるのではないのでしょうか。

(中野信子 『「バイアス社会」を生き延びる』)

※(文中のことばの意味)

概念	：	考え。
固執	：	自分の意見にこだわari、ゆずらないこと。
抽出	：	ぬき出すこと。
リソース	：	処理能力。
スキップ	：	物事をぬかして次に進むこと。
統帥	：	集団を指揮して、まとめること。
洞察	：	物事を見通すこと。
概要	：	物事全体の大まかな内容を簡単にまとめたもの。

問 4

I	•	II
---	---	----

にあてはまることばの組み合わせと
して、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	Ⅰ .. 東京の人間は寒がり	Ⅱ .. 大阪人は暑がり
イ	Ⅰ .. 東京の人間は冷たい	Ⅱ .. 大阪人はせっかち
ウ	Ⅰ .. 東京の人間は厳しい	Ⅱ .. 大阪人は世話焼き
エ	Ⅰ .. 東京の人間はおだやか	Ⅱ .. 大阪人は面白 おもしろ い

問5 ー線④「外集団バイアス」とありますが、このような「バイアス」がかかる理由として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 物事を正確に判断するよりも、時間をかけずに選択せんたくする力が求められるから。

イ 限られた時間内に行動するよりも、生きるために努力する力が求められるから。

ウ 不確かな情報を信じるよりも、正しいものを見分ける力が求められるから。

エ 周囲の環境に合わせるよりも、自分の責任で判断する力が求められるから。

問6

【*】にあてはまることばを、文中から二字でぬき出しなさい。

問7

次に示すのは、この文章を読んだ四人の生徒が話している場面です。本文の内容として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア (生徒A)―筆者は同じような人が集まることで真実性が高まるという結論を導くために、「赤い服」と「数学が得意な人」とで対比的に証明していたね。

イ (生徒B)―バイアスは「認知の歪み」といって一般的に聞こえが良くないけれど、人間の生存には必要な要素だと筆者は前向きに述べていたよ。

ウ (生徒C)―「たとえば」「もちろん」などの接続語を使ってバイアスについて説明してから、「でも」の後で人間の脳の限界が示されたのでバイアスは不要だとわかったよ。

エ (生徒D)―「〜でしようか」「〜ですよね」と読者に語りかけるような書き方によって、筆者の言うことが正しいと思込込ませることができたね。

【二】

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

生まれつきずばぬけた才能を持つ「ギフテッド」の米倉愛は、小学校では授業中に自分の知りたいことを優先してしまい、周囲になじめなかった。中学受験をして偏差値が高い中学校に入学したが、結局そこでの生活もうまくいかず、公立中学校に転校した(クラスは三十五人学級)。そんな愛の話を、新しくクラスメイトとなった優希と誠が聞いている。

「楽になれる」はずの、中学生活はちつとも楽ではなかった。小学校のときはまた別の苦しみがあった。

自分を出せば、きつと浮いてしまう。マ―ヤたちのグループにいるためには、みんなに合わせなくてはいけない。

そのことは予想以上に、神経を消耗させた。

夏休みが目前のある日、数学の授業で、D先生が応用問題を出した。

「これは、はつきりいって高校数学。でも君たちの優れた頭脳なら、出来るかも知れないな。さあ、分かる人」

D先生は、数学を愛してはいても、子どもに教えることへの情熱に関しては、少しピントがずれていた。難しい問題を出しては生徒を試して、喜んでるように見えた。

愛には答えが分かった。解けたことで、血が勝手に騒ぎ出した。胸が高鳴る。

①手を挙げたい衝動にかられたが、こぶしを握ってグツとこらえた。

目立つてはいけないのだ。

すると先生が、

「米倉、どうだ？」

目が合ったわけでもないのに、いきなり振ってきた。首を横に振

れば良かったのに、答えをつぶやいていた。

「ビンゴ」

D先生は嬉しそうに、上体を左右に揺らした。

「さすがは、米倉だなー。②米倉は入試の算数、満点だったもんない。まさに、逸材」

クラスでどよめきが起こった。

明星女学院の入試問題の算数は、かなりの難問が出ることが定評で、半分得点できればいいという噂もある。

だからこそ、愛にとっては国語の記述の点数が取れなくても、断然有利に働いたのだ。

D先生の言葉に、愛は絶句した。

どうして、そんなことを、みんなの前で喋るのだろう。

愛は目を伏せた。それを、はにかみや※謙遜とでも捉えたのか、D先生はますます調子にのった。

「うちの入試問題で、満点をとる生徒は、滅多に出ないんだよ。女子は数学が苦手だっていうからね。失礼、これはセクハラでした」

D先生は自分の後頭部を、ぱつこんと手のひらでたたいた。教室はしりけきり、ウケをねらったらしいD先生は、バツが悪くなったのか、話を戻した。

「米倉、おいおい話そうと思っていたんだが、是非、日本ジュニア数学オリンピックに挑戦してみないか。先生は全面的にサポートするよ」

愛は顔を上げた。

日本ジュニア数学オリンピック？ 数学で闘うってこと？ すごく面白そう！

一気に血流が上がった。でもすぐに、自分で自分に冷水を浴びせた。

そんな目立つことをしたら、マーマヤたちとの関係が、おかしくな

ったりはしないだろうか。そう考えることすら、※不遜なのだろうか。

愛は机の角をじつとにらんだ。

自分の才能を恨んだ。

普通でいいのに。普通がいいのに。

マーマヤたちからは④羨望の目で見られるようになった。対等に見えた関係が、グループの中でなんとなく、ちやほやされるような立ち位置に変わった。

嫉妬心も隠されていたかも知れない。明星女学院の生徒ならば、小学校のときには勉強で、断トツでトップクラスにいただろう。でも、トップばかりが集まってくる学校に入ると、やはりそのなかでの※ヒエラルキーが生まれてしまう。

プライドの高さが足かせになることで、トップではなくなること、余計に⑥酷だ。もし一ランク落とした学校に行っていれば、今でもトップでいられただろうに。愛が、そんな彼女たちから妬まれたとしても、不思議ではない。

出過ぎないようにという注意が、いつそう必要になった。

D先生は、さすがに教室で言うことはなくても、廊下などで会うと、しつこく「日本ジュニア数学オリンピック」のことを勧めてきた。

隣にマーマヤたちがいても、お構いなくだ。

「③興味ありません」

愛がそっけなく目をそらせると、

「もったいない。実にもったいない。その才能、先生がほしいくらいだ」

D先生は悔しそうに、下唇を突き出した。

目立つことをしてはいけないのだ。それは「協調性」を乱すこと

なのだ。

神経にかけるやすりが、ピッチをあげた。

あるときから、数学の授業の前になるとお腹が痛くなり、保健室に行くようになった。

しばらくすると、数学の授業のある日には、朝お腹が痛くなり、学校を休むようになった。

そしてとうとう、冬休みを待たずして、愛は不登校になった。



優希は愛の話を聞いているあいだ、ときおり涙が出そうになった。でも、愛の話を邪魔したくないし、自分が泣くのは違う。

ただまっすぐ川の流れを見つめ、心をなだめ落ち着かせ、じっと聞き入った。

自らの探究心や意欲を、根こそぎ折られた小学生のころ――。

周りに◎迎合しなければと必死になり、神経をすり減らした明星女学院のころ――。

際だった才能を持つギフテッドだったがゆえに、愛が余計に背負ってきた孤独感を思うと、胸が締めつけられる。

愛は一度深呼吸をすると、続けた。

「さつきも言ったけど、みんな違ってみんないい、はずなのにね。

学校って校則みたいに目に見えるルールよりも、同調圧力みたいに目に見えないルールの方が、意外とやっかいだったりするかも」

「同、調、圧、力」

誠が句切りながら復唱した。優希が大きくうなずく。

「それぞれ違うことを考えていたり、思っていたりするはずなのに、みんな意見を言わないよね」

愛は背中をベンチの背もたれにあずけ、続けた。

「こう言ったら、あの人になんて思われるとか、嫌われないとか心配ばかり。ま、自分がそうだったから分かるんだけど。④本当は、三十五通りの心があるはずなのに」

愛の言葉は、優希の痛いところをぶすりと突いた。

人にどう思われるか、いつも先回りして考えてしまう自分の心を、見透かされているみたいだった。

「同調圧力があつたとしても、思ったことを、感じたことを、ちゃんと言うことが大切なんだね」

優希は胸に両手を重ねて、自分自身に言い含めた。

「透明なルールってさ」

「透明な、ルール？」

愛の言葉をなぞった。新たなワードが、心の中をすっと切り開いた。何かをつかめそうな予感がする。

「ああ、同調圧力とかの、目に見えないルール。同調圧力は確かにあるんだけど……」

愛はそこで切って、考えるように首を傾けた。

あるんだけど……？

優希はじつと、その続きを待った。

「透明なルールって、同調圧力だけじゃない、って今になって思うんだ」

「どういうこと？」

思わず前のめりになってしまい、あわてて愛から体を離す。

「明星女学院のときに、日本ジュニア数学オリンピックピクを勧められたとき、目立ちたくないから、わたしは頑なに断ったでしょ」

「うん」

「でもあれって、みんなの反応を勝手に決めつけていたのかも知れない。透明なルールで、自分で自分を縛っていたんじゃないかな」

て」

「ごめん、よく分からない」

「あのとき、もし、ジュニア数学オリンピックに出ようとしたら、

って」

「それはありだよ」

誠が相づちを打った。

「だからね、あのとき、同調圧力なんて本当はなかったかも知れない。自分が自分に作ってしまう、透明なルールに、縛られていただけかも」

——自分が自分に作ってしまう、透明なルール

気付いたら、優希は少しの間、息を止めていた。

（佐藤いつ子 『透明なルール』）

※（文中のことばの意味）

謙遜 … ひかえめな態度。

不遜 … 思い上がり。うぬぼれ。

ヒエラルキー … ピラミッド型の順位づけ。

問1

~~~~~線①②③のことばについて、文中における意味として、最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 羨望  
せんぼう

- ア 遠慮すること  
えんりよ  
イ あこがれること  
ウ くやしがること  
エ うらやましがること

② 酷だ  
こく

- ア つらい  
イ 恥ずかしい  
は  
ウ 納得できない  
なっとく  
エ おもしろくない

③ 迎合  
げいごう

- ア 自分の思いを伝えること  
イ やさしい態度で接すること  
ウ 調子や考えを合わせる  
こと  
エ 自分の才能をアピールすること

問2 ——— 線①「手を挙げたい衝動にかられたが、こぶしを握

ってグッとこらえた」とありますが、この時の愛の気持ちを説明したものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 難しい問題を解ききった達成感があつたが、まずは自分以外に解けた人がいなかったか確かめないといけない。

イ 自分は難しい問題も解けることをアピールしたかったが、解けない人のことを考えると遠慮しないといけない。

ウ 難しい問題が解けたことがうれしかったが、自分たちの力を試して喜ぶようなD先生の挑発に乗ってはいけない。

エ 高校レベルの難しい問題が解けたことに興奮したが、まわりのみんなとはちがうところを出してはいけない。

問3 ——— 線②「米倉は入試の算数、満点だった」とありますが、

愛はこの言葉に対してどのような反応をしましたか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実は算数が得意なことをばらされて恥ずかしくなり、まわりの様子が見られなくなった。

イ みんなの注目が自分に集まるようなことを言われ、その場にいたたまれなくなるほど動揺した。

ウ クラスメイトの中でも勉強ができるとわかり、自慢したくなる気持ちを必死におさえた。

エ 入試で高得点を取ったことを知られてしまい、みんなの冷めた視線を避けようとした。

問4 ——— 線③「興味ありません」について、次の各問いに答え

なさい。

(1) 本当は「日本ジュニア数学オリンピック」に興味を持っていることがわかる愛の行動を、**これより前の**文中からぬき出しなさい。

(2) 愛はなぜ「興味ありません」と答えたのですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 中学生生活を送るうちに、日本ジュニア数学オリンピックに出ることよりもマーヤたちと仲よく過ごす方が楽しいことがわかったから。

イ 自分は日本ジュニア数学オリンピックに出るような特別な存在ではなく、普通の中学生であることをマーヤたちに示したかったから。

ウ 目立たないように気をつけて過ごしてきたのに、日本ジュニア数学オリンピックに興味をもってしまう自分がいやになったから。

エ D先生が何度も勧めてくることがわずらわしくなり、日本ジュニア数学オリンピックへの興味がすっかりなくなってしまったから。

問5

——線④「本当は、三十五通りの心があるはずなのに」とありますが、このあとに続く言葉として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア みんな違ってみんないい
- イ 意外とやっかいだったりする
- ウ みんな意見を言わない
- エ 心配ばかり

問6

にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア マーヤたちはひょっとして、いっしょに喜んでくれたり、応援してくれたりしたんじゃないかな
- イ 数学の勉強に自信がついて、マーヤたちに教えてあげることのできるようになったんじゃないかな
- ウ マーヤたちのグループから離れちゃったとしても、数学が好きな別のグループに入れたかも知れないな
- エ もしかしたら数学の勉強に夢中になって、マーヤたちのことなんて気にしなくなったかも知れないな

問7

登場人物を説明したものとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 愛は、明星女学院を転校することになったのはD先生のせいであり、まわりに合わせないといけないという同調圧力に押しつぶされたからだと考えている。
- イ D先生は大人げがないところがあり、愛が持つ数学の能力に嫉妬して、日本ジュニア数学オリンピックにしつこく誘い、愛を困らせて喜んでいた。
- ウ 誠は、愛の言葉に反応したり相づちを打ったりすることで、自分の思いがまともでないでいる愛の言葉をひきだし、愛と優希の仲をつなげている。
- エ 優希は、愛が転校したいきさつを聞いて、勝手に作り上げたまわりの反応にとらわれて思いを言えないでいるのは、自分も同じだと気がついた。

三 次のことばに関する各問いに答えなさい。

問1 次の（ ）にあてはまることばとして、最もふさわしいものをあとから一つずつ選び、それぞれ答えなさい。ただし、同じものを二回以上使えません。

- ① あれだけ練習したのだから、（ ）失敗しないだろう。
- ② あらわれた虹は、（ ）空にかかる大きな橋のようだ。
- ③ （ ）勇気を出さなかったら、友だちになれなかった。
- ④ 私はあの子の気持ちが（ ）わからない。
- ⑤ （ ）海は青いのか、先生にたずねてみよう。

どうして まさか 少しも もし まるで

問2 次の（ ）にあてはまることばとして、最もふさわしいものをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じものを二回以上使えません。

- ① 舌を（ ） …… 非常におどろいて感心する。
- ② 手を（ ） …… 仲間になる。協力する。
- ③ 手を（ ） …… 今までの仕事やつきあいをやめる。
- ④ 手を（ ） …… うまくあつかえず困る。てこずる。
- ⑤ 腰を（ ） …… ものごとにとりかかる。
- ⑥ 腰を（ ） …… 途中でじやまをして中断させる。
- ⑦ 尻を（ ） …… やる気を起こすようにはげます。
- ⑧ 尻を（ ） …… 他人の失敗の後始末をする。
- ⑨ 腹を（ ） …… 決心する。
- ⑩ 腹を（ ） …… 本心を打ち明ける。

|   |     |   |     |   |    |   |    |
|---|-----|---|-----|---|----|---|----|
| ア | 上げる | イ | 決める | ウ | 割る | エ | 巻く |
| オ | 焼く  | カ | たたく | キ | 組む | ク | 折る |
| ケ | ぬぐう | コ | 引く  |   |    |   |    |

問3 次の短歌の（ ）にあてはまることばとして、最もふさわしいものをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じものを二回以上使えません。

- ① 街<sup>まち</sup>をゆき 子供<sup>こども</sup>の傍<sup>そば</sup>を 通る時  
（ ）の香<sup>か</sup>せり 冬がまた来る
- ② （ ）の 訛<sup>なまり</sup>なつかし  
停車場の 人ごみの中に そを聴<sup>き</sup>きにゆく
- ③ （ ）は かなしからずや  
空の青 海<sup>うみ</sup>のあをにも 染<sup>そ</sup>まずただよふ
- ④ 観覧車 回れよ回れ  
（ ）は 君には一日<sup>ひとひ</sup> 我<sup>われ</sup>には一生<sup>ひとよ</sup>
- ⑤ むらさきに （ ）の花は ひらくなり  
人を思<sup>おも</sup>へば 春はあけぼの
- ア ふるさと  
エ 白鳥<sup>しらとり</sup>
- イ 想<sup>おも</sup>ひ出<sup>いで</sup>  
オ みかん
- ウ すみれ

四 次の――線のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 流れがはやい川に近づくのはキケンだ。
- ② ネコはネズミのテンテキだ。
- ③ 幼いころから読書にナレ親しんでいる。
- ④ カイマク試合で投手をつとめる。
- ⑤ シヤソウから見える風景をながめる。
- ⑥ 山の頂<sup>いただき</sup>を目指す。
- ⑦ 一つの言葉から派生<sup>はっしん</sup>した語を調べる。
- ⑧ 服装<sup>ふくそう</sup>をととのえて面接にのぞむ。
- ⑨ 洗<sup>せん</sup>たくでセーターが縮<sup>ちぢ</sup>んだ。
- ⑩ 近くの雑木林<sup>ざつぼりん</sup>を歩く。

これで問題は終わります。